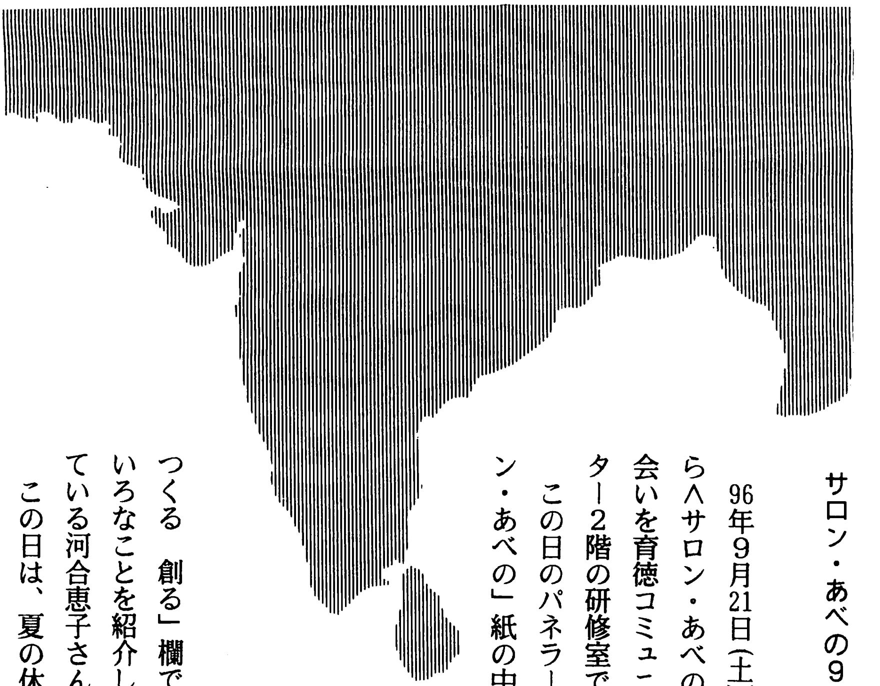
KSKQ 第三種郵便物認可KSKQ（サロン・あべの）通巻1802号1997年 2月28日

出会い ふれあい 助け合い

サロン あべの

Vol.124



＊＊＊＊＊＊＊＊

作る つくる 創る

インドの話―寺院から物売りまで―

サロン・あべの9月の出会い

96年9月21日(土)午後1時から＜サロン・あべの＞9月の出会いを育徳コミュニティーセンター2階の研修室で開催した。

この日のパネラーは、「サロン・あべの」紙の中の「作る つくる 創る」欄で毎回、いろいろなことを紹介していただいている河合恵子さんである。

この日は、夏の休暇を利用してインドへ旅行したお話をしていただいた。

ツアーの内容は、インドの寺院巡りを中心としたもので、写真や民族衣装を交えての説明。

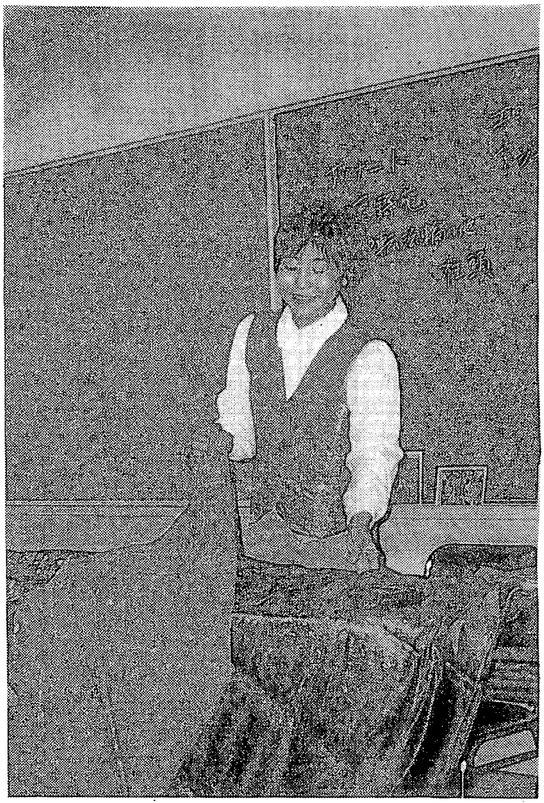
まず、ボンベイから電車でアウランガバードへ向かう。

インドの寺院は、修行の場所となっている。エローラ石窟寺院は、岩山を上からと下から掘って作られている。アジャンタ石窟寺院は、描かれた絵に特徴のある寺院である。

次にアウランガバードから飛行機でジャイプール、そしてバスでアグラへ。移動には象さんタクシーにも乗ったそうで、高くてけっこうゆれたそうである。

一九九一年九月三日第三種郵便物認可（毎日発行）

第三種郵便物認可ＫＳＫＱ（サロン・あべの）通巻１８０２号１９９７年　２月２８日



食べ物の方はカレーが中心で、あとはナン(パンみたいなもの)やヨーグルトで、フルーツはリンゴとバナナである。紅茶も本場のものを味わった。

観光の間には、至るところで物売りの子供たちと出会い、押し売りではなくて、絵や装飾品の見方やガイドさんが説明してくれない景色の良い所など、商売以外のことを教えてくれたりと、自分たちの生活のために一生懸命に頑張っている姿におもわずチップを出してしまう。

とにかく、インド旅行での体験を元気いっぱい、お話していただいた。

参加者13名(山村貴司)

サロンに参加して

中西利香

久しぶりに河合さんにお会いして、とっても元気そうでした。インドの話をしていただいて、楽しいひとときを過ごしました。

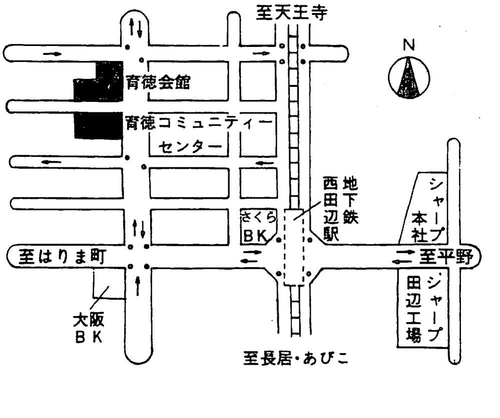
話の中で私の一番頭の中に残ったことは、象に乗っていた人が急に落されたという話にはびっくりしました。落ちた人に怪我がなくてよかったですね。

インドの寺院をあちらこちらと紹介していただいて、とても勉強になりました。

お知らせ

＜サロン・あべの＞１１月の出会い

日　時　平成８年１１月１６日（土）
　　　　午後１時～４時
場　所　育徳コミュニティーセンター２階
　　　　（スロープ、車いすトイレあり）
　　　　〒545 大阪市阿倍野区阪南町５－１５－２８
内　容　「絵画の楽しみ」
　　　　～絵が好き、人が好き～
　　　　パネラー　吉田幾俊氏
会　費　なし
お問い合わせ先
　　　　TEL０６－６９１－１０２８（冨田慶子）



好評

岡　知史氏のエッセイ集
・ほんの少しの神に近い部分
・知らされない愛について
頒価＝七〇〇円
問い合わせ先＝TEL06・六九一・一〇二八(冨田)

第三種郵便物認可ＫＳＫＱ（サロン・あべの）通巻１８０２号１９９７年　２月２８日

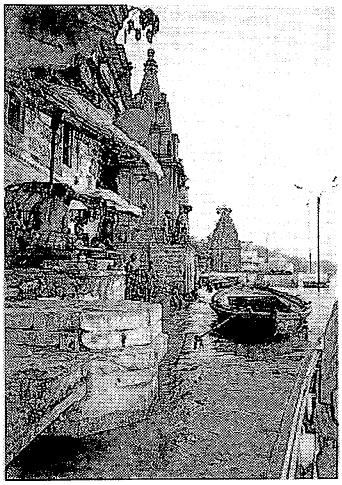
作る　つくる　創る

河合恵子

38

ふたたび「イーハトーヴ」

前回、「イーハトブ」という宮沢賢治の言葉を引用させていただいたが、これは「イーハトーヴ」ではないかというご指摘がありました。たしかに「ブ」ではなく、「ヴ」で「春と修羅」第二集の「遠足統率」では「イーハトーヴ」になっているのですが、「注文の多い料理店」の広告文のなかでは「イーハトヴ」のようです。花巻市の宮沢賢治記念館に行かれた吉原さんに教えていただいたところ、どちらも使ったようだとのこと。いずれにしても「著者の心象中に、この様な状景をもって実在したドリームランドとしての日本岩手県である。そこではあらゆることが可能である。人は一瞬にして氷雲の上に飛躍し大循環の風を従えて北に旅することもあれば、赤い花杯の下を行く蟻と語ることもできる」場所です。賢治は法華経を信じ、永遠のいのちとの共存を求めて心の世界にのびる透明な軌道をはしる列車の窓から自由自在、縦横無尽に躍動するいのちの輝きをスケッチした。



ところで先日インドに旅する機会を得たのですがなかでも印象的であったのはアジャンタ・エローラの遺跡とアンベール城、タージ・マハルとベナレス。特にヴァルナ河とアッスィー河そしてガンジス河の交わるヴァーラーナスィー（ベナレス）はシヴァ神を祀る聖地。雨期の終わりであったため、水量が多く、川幅も約六百メートルと通常の二倍で水の流れはとても速いもの。ガートとよばれる沐浴場でガンジスの水を浴びるひと、祈るひとで賑わっていました。また、近くには火葬場のガートもあって生と死、あらゆる生活が渾然と溶け合っています。しかし、想像に反して、対岸は緑の森。昇る太陽を舟から眺めていると、喧騒とは程遠く、荘厳な雰囲気に包まれ、自然の大きさ、人の営みを感じさせられます。

知的障害のある人の支援体制づくり７

阿部幸恵

　数カ月前に、東京で、あるセミナーがありました。その中に、知的障害のある人が、どのように自分達で話し合いをしているのかを知ってもらうための、パネルディスカッションがありました。知的障害のある本人一〇人がパネラーとして前に出て、日頃の話し合いの様子を再現しました。時に、話が本題からそれて、うまく進行されなくなると、客席の前にいる支援者から助言がなされます。

　私自身、先回紹介した、「ピープルファーストはなし合おう会」に、結成当初から関わっているのですが、そんな光景を前にして、これまでの支援の経緯が思い起こされました。

(二) 支援者の関わり
―「ピープルファーストはなし合おう会」の場合

司会は誰か？

　この会の始まりは、数カ月後に迫った東京都との行政交渉の準備からでした。ですから、決めるべきこと・やるべきことが、山のようにありました。一～二週間に一回の割合で開かれる会議だったので、尚のことです。このような状況の中、いわゆる本人の「自己決定」を尊重しながら、進めるということは、なかなか大変でした。

　本人の決定権が保障されているかどうかは、誰が話し合いの主導権を握っていたかで見えてきます。会議の司会を誰が担っていたかを見てみます。

初期　Ⅰ、支援者が代行で担当
　　　Ⅱ、支援者が本人に進行内容を伝え、それを本人がそのまま言う
中期　Ⅲ、本人が順番に担当（本人・支援者の助言をうけながら）
　　　場数を踏んだ本人が支援者の助言を受けながら、進行
現在　Ⅳ、リーダーシップのある本人が担当

　ⅠからⅢまでの間は約3カ月。支援者は、知的障害のある本人の活動にある程度理解のある人々でしたが、初めから、うまくはいきませんでした。

　Ⅰ期の、支援者が主導で進行している頃の会議の様子は、本人一人ひとりを指名して、意見を求めなければ、シーンと静まりかえっているといった状態でした。また、意見を求められた人もそのような中、なかなか言いたいことが出てこなかったり、それ以前に、自分の意見を述べることに慣れていない、といったことがありました。意見を述べる場合でも、自分の安心できる支援者を見ながら言う状態が続きました。

　これではいけないと、「今日の司会は誰がやるか」と本人が司会を担当するこ

とを徹底しました。そして、司会は「次に何を言ったらいいのか」と支援者にききながら、経験のない人も段々とうまくできるようになってきました。（Ⅱ～Ⅲ期）

Ⅳ期になると、より支援者からの助言が少ないかたちで、進められます。

現在、代表、事務局長などの役員を決めたことも手伝い、Ⅳの状態が続いています。支援者は、正式な出席者ではないという認識がもたれるようになりました。また、話が本筋からそれたときに、本人同士で注意し合うようになりました。

これらの段階を経て、本人主導になってきた訳ですが、それには、本人が様々な場を踏んで力をつけていったのと同時に、支援者も参加の在り方を考え、実践していったという相互作用がありました。

本人主導だからといって、支援者がまったく発言しない訳ではありません。しかし、支援者の発言はあくまで参考として挙げられなければなりません。その適当さを支援者は学んでいきました。

Ⅰ～Ⅳと段階的に説明しましたが、時に一回の会議中にこの段階が入り交じることもあります。初めはⅣで、おしまいはⅡということもあります。また、理解力の高い本人だけが、参加しているときもあります。

このような状況になる原因としては、会議の時間に制限があるからと、必要な支援がないから、ということが挙げられます。例えば、今日中に決めてしまいたいのだけれど時間がない場合、支援者・司会から提案があり、後は賛否が問われるだけという時もあります。また、話の流れについて行けていない人が、助けを求められない、また、周りの人がそれに気がつかないといった場合です。「時間がないから」「ゆっくり説明していられないから」を理由に先に進めることは、知的障害のある人の本人活動を支援しているとは言えません。結成当初よりは、まだ良くはなったものの、時として、進め方のまずさが現れます。

責任と支援と

次第に、役割分担が必要になってきました。例えば、本人と、必要な場合は支援者とで係が編成されます。

これも、司会の場合と同様、支援者主導から本人主導という経緯をたどりました。初め、同じ係の支援者が、先回りして手配したり、またそれを本人が疑問に感じない、という状況がありました。

しかし、一部の本人、支援者が疑問をもち、支援体制の見直しがはかられました。支援者は、何か決めるとき・行動するときは本人に相談すること、また、決定権は本人にあるということを念頭におくことが求められました。行きすぎた支援は本人の力を奪ってしまいます。

数々の企画のなかで、自分の役割を成し遂げていく中で、「役割」を持つということは、他から仕事を与えられることではなく、自ら「責任」を持つことだ、という認識が生まれてきたようです。同

奥田真祐美

シャンソン　リサイタル

９６年大阪公演

♪♬♩♪♬♩♪♬♩♪♬♩♪♬

日　時＝平成８年11月15日（金）

開場＝18:30，開演＝19:00

会　場＝サンケイホール

入場料＝前売￥５，０００．

当日￥５，５００．

問合わせ・申込先＝奥田真祐美

TEL・FAX０６-６９２－８７７４

じ係の支援者に任せるのではなく、「〇〇のことで、相談したい」という形で、本人から支援者に連絡がくるようになりました。

支援者の葛藤

障害の種別に関わらず、障害のある人の介助を経験した方はご存知かと思いますが、一緒にいるとき、「その人に合わせる」ことの必要性を感じます。また、介助をされる側が主体となってこそ「介助」といえます。

しかし、自分と異なるペースに合わせるわけですから、そこに葛藤が生じます。障害があるかないかの差別感、社会観や価値観の違いを感じます。

会議中も、出るべき結論がなかなか出ず、支援者はイライラします。そのとき、支援者はその葛藤を、どこまで冷静に見られるかが、良い支援ができるかどうかの大きな分かれ目になります。

今年一月に来日した、アメリカのピープルファーストの支援者、キャシー・バーンズ氏が講演の中で「支援していくことは、一つの芸術作品をつくり上げていくことと同じだ」と言っていました。「支援者は、時に友人であり、指導者であり、介助者であり…」と。

その様な微妙な関係とは、一体どういうものなのでしょうか？

次回は、支援者を対象にした勉強会の実践を紹介します。

おもろい　姉ちゃん

お弁当

秋、小・中学生は運動会。高校生は文化祭の季節です。

夜勤明けが、小学校の運動会にぶつかった私に、小学六年のO君が

「先生、今日来るん？」

と聞いてきた。

「行っても先生のお弁当ないしな」

と答えると

「来たら、僕のお握りを一個あげる」

とかわいいお返事。

もちろん応援に出かけました。

そして、数日後、厨房の先生に昼食を頼むか断るか聞くつもりで、私の担当の高校生のA君に

「文化祭、いつ？」と尋ねると

「言わん、お前来るもん」とかわいくない返事。

小さいお子さんにまとわりつかれて面倒くさいとお思いのお母さん、そんな時期はすぐ終わりますよ、と思った未婚の私でした。

田渕　美登利

★屋根のない観光バス

何度も電話をくださったのですね。ごめんなさい。私は、このひと月の間、遠い外国で暮らしていました。

ほとんど一人ですごしていましたから、観光バスにも乗ったのですよ。硬貨を一枚、バスの運転手に渡せば、半日、街を走ってくれる気楽なものでした。

それは屋根のない二階建てのバス。初秋の暖かい光をいっぱい顔と髪に受けて、私は流れる風のすきまから、まぶしい風景を眺（なが）めていました。

ガイドの声は、聞きなれない外国語で、壁も天井もなく走るバスの二階では、なにひとつ聞きとれません。カーブのたびに激しく揺れるこの車が、このままどこに行くのか知らないまま、私は、頭のなかの地球儀をぐるぐると回して、自分のいる場所を思いうかべていました。

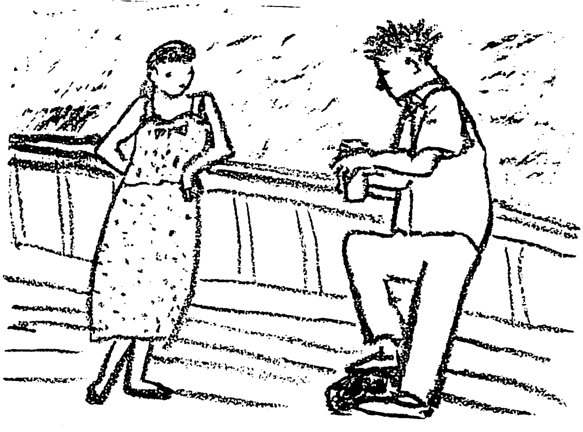
まもなく、バスは長い牧草地を抜けて、小さな港街に入ります。青い海の上に白い船が並んでいました。石畳の道では、知らない子どもたちが大きく手を振ってくれました。出会うこともなく、私は別れの挨拶を受けていたのです。屋根のないバスの上には、沿道の樹の枝が垂れていて、その枝さえも私に別れを告げているようでした。

確かに、私の観光バスは、すべての風景の表面を横切っているだけでした。たくさんの家を見ましたが、そこを訪れることはありません。道ゆく人の姿は、たいてい横顔か、後ろ姿でした。色とりどりの花の畑は道のむこうに広がっていて、香りが届くこともありません。バスから見える一切のものが、私には無関係のようでした。

いったい、私は、どうしてバスに乗っているのでしょう？　私には何のかかわりもないものを何時間も見て、なんの意味があるのでしょう？

そんな疑問をもったとき、あなたのことを思いだしたのです。あなたに、この風景の絵はがきを買って送ろうと思いました。すると、私には何の関係もなかった風景が、あなたとのつながりを彩（いろど）るものとなりました。誰のものともわからない白い船の姿も、きっとあなたと夢を語りあうとき、私たちを想像の海へと駆りたててくれることでしょう。

人は人としか結びつくことができないのですね。どんなに素晴らしい海や野原でも、私たちと親しく結ばれることはあ



第三種郵便物認可ＫＳＫＱ（サロン・あべの）通巻１８０２号１９９７年　２月２８日

りません。私たちが美しい風景や香（かぐわ）しい花とつながるのは、誰か他の人と共に見たり感じたりして、それをわかちあうときだけ。あなたのそばにいる誰かを通してのみ、私たちは世界と結びつくことができるのです。　（知）

美智子のこんな話

岸　田　美智子

療護施設自治会全国ネット総会に参加して

九月七・八日、四国の松山で療護施設の自治会全国ネットの第三回総会があり、参加してきました。

この総会にはアメリカの女性障害者の講演会や、日本の現状をふまえて施設側、自治会、施設の職員、専門家などの立場からの発言を受けてのシンポジウムなどがありました。

この第三回総会の大きな目的の中に施設障害者の人権ガイドラインを作成するという目的がありました。

アメリカやスウェーデンなどはもうすでに入所施設はなくなりつつあるという発言などもあり、施設の中をどんなに改善していっても、やはり施設の限界があるのではないかと思いました。

東京の方では、とても施設の改善が進み障害者の人権が守られ、生活のすべてを障害者が自己決定できるようになっている施設があります。もちろん、全部屋個室で、職員数は基準の三倍になっていて、障害者の海外旅行などにも施設職員がついていくそうです。

こうなってしまうと逆に施設障害者の人は地域に出る意味が見えてこないようです。なぜ、わざわざ介護保障もない地域へ出なければならないのかということになってしまうようです。このような地域と切り離された施設改革になるのなら、とても恐いと思います。

施設の中の生活、食事、トイレ、風呂のあり方や同性介護の保障など、施設の中は問題だらけですが、その問題をどのような方向で改善していったらいいのか、とても難しいと改めて感じました。

その一つのよい例に、施設からの外出の責任問題があります。

その解決方法としてとてもいい例を、シンポジウムの記録から要約しておきますので、読んでみてください。

●（抜粋要約）

「事故がおきたらどうするんだ」をこえるためには

○まず一人で自由に外出してください。

○道路の状態が悪い現状や、危険をどう回避するかということについてキチンと事前に話をしておく。その上で一人で行くことを選択した場合、それを尊重し

ます。
○小さな事故等の経験を積んで行く中で、危険を回避する力を獲得していくと思います。
○いろいろな経験、失敗経験を通しながら、「常識」と呼ばれるようなものを身につけていきます。
とにかく、あらゆる経験をする機会をキチンと保障することが大切だと思います。

■■

＜サロン＞紙に感謝

ほんとうに涼しくなりました。お変わりないでしょうか。
「サロン・あべの」紙（一一三二号）、有り難うございます。
一頁の「さろん亭」記事から読みすすめて、ふと五頁の「ゾウの時間・ネズミの時間」に目がとまりました。たしか、すこし前、と言っても一～二年前でしょうか、話題になった本ですね。評判を耳にしながらも未だ読んでいないので、岡さんの文章を読ませていただき、自分でもこの本を読んでみようと思います。
思いがけない本との出会い、＜サロン・あべの＞に感謝です。
また、岸田美智子さんの「こんな話」にあった「介護」のこと、私たちすべての人間がいずれ直面することだけに、他人事ではすまされないと感じています。
では、風邪を召されないよう、お過ごし下さい。

M・D

わがまち阿倍野　絵はがき散歩④

文の里四丁目

この辺りは大正中頃から開発が進み、近くに現在の桃山学院高校、明浄学院高校、市立工芸高校が出来、通学のための新しい駅が「文の里」と名づけられたことからこの町名がついたらしい。その頃に建てられた家はどんどん建て替えられ、新しい家並になる中で、時間が後戻りしたようなところがポコッと残っている。

絵葉書　わがまち阿倍野
○歴史のあるまち
○チンチン電車の走るまち
○まちかどスケッチ

各シリーズ五枚組一五〇円

感謝

カンパ、お茶菓子、写真、冊子等のご寄贈。十周年記念誌、エッセー集等、お買い上げありがとうございました。
お礼を申し上げます。
河合恵子、皿谷千秋、田辺サカエ、
たんぽぽ（朗読グループ）、
表谷恵美子、三谷勢津子、吉原和郎、
その他の方々

第三種郵便物認可ＫＳＫＱ（サロン・あべの）通巻１８０２号１９９７年　２月２８日

一九九一年九月三日第三種郵便物認可（毎日発行）

サロン隣組ニュース

■「サロン淀川」

○サロン淀川１１月の出会い

日　時‥平成８年１１月１７日（日）
　　　　午後１時３０分〜４時

場　所‥淀川区在宅サービスセンター「やすらぎ」
　　　　［大阪市淀川区三国本町2−14−3］

テーマ‥「愛染かづら」映画説明
　　　　歌、愛染かづらを全員で合唱

パネラー‥竹 之 内 キ ク エ 氏
　　　　老人大学、シルバーアドバイザー、ボランティア協会、語り部

会　費‥な　し

問い合わせ先‥☎06-３９４−２９００
　　　　大阪市淀川区社会福祉協議会
　　　　ボランティア・ビューロー

■「ウイズ東淀川」

○ウイズ東淀川１１月の出会い

日　時‥平成８年１１月１０日(日)
　　　　午後１時３０分〜４時

場　所‥東淀川会館３階(エレベータ・車いすトイレ有り)

内　容‥「音楽と子供たち」
　　　　〜ロウの子供たちに音楽の楽しさ
　　　　を教える熱血先生の話〜

講　師‥安 田 美 和 子 氏
　　　　大阪府立聾学校小学部音楽科

会　費‥な　し

問い合わせ先‥
　　　　電話06-３４０-３０８２(鈴木昭二)
　　　　FAX06-３２０−４００４(宮脇　均)

朗読テープのご案内

朗読グループ「ぽけっと」のご協力で、＜サロン・あべの＞紙１２３号の録音テープが出来ました。バックナンバーは３９号から、１２３号の分があります。

５０号は、９０分と６０分の２本のテープに、１００号は、１２０分テープ２本に、＜サロン・あべの＞１０周年記念誌「はあとが、はろー！」は、９０分テープ２本と１２０分テープにそれぞれ収録されています。又、絵本「未知の記憶」（作・絵＝中川勝彦）、「ラジオたんぱ」（３０分）放送の『＜サロン・あべの＞平成７年５月の出会い』もあります。

いずれもご希望の方には、ダビングをしますので、冨田までお申し出下さい。

（☎０６−６９１−１０２８）

運動会

体操服に赤帽の子におばさんが
「あんたら、運動会いつ？」
「あした」
「ガンバリや」
「うん」元気に走りだして行った。
なにがなんでも「かるた」です。

解説付き　かるた冊子一五〇円

編集人；サロン・あべの運営委員会・＜サロン・あべの＞Vol.124[`96.10.19.発行] 定価￥１００.
代　表；上平幸雄〒545 大阪市阿倍野区阪南町２−１９−２−３０３　電話06-621-4365
連絡先；冨田慶子〒545 大阪市阿倍野区阪南町６−３−２６　電話０６−６９１−１０２８
表　題；井上憲一・筆　　文中イラスト；石田美禰子
郵便振替口座；サロン・あべの　００９５０−９−２６９４１
印　刷；セルフ社〒546 大阪市東住吉区北田辺町4-23-2ミスターDビル2F ℡06-719-8212 FAX06-719-8213

発行人；関西障害者定期刊行物協会［大阪市城東区東中浜２−１０−１３緑橋グリーンハイツ１Ｆ］